

①円の国際化が遅れているのは日本経済の信頼低下、金融市場の閉鎖性などが理由ではない。日本が経常黒字を抱えているために、援助などで円を外国に流してもそこで保有されず、国内に戻ってしまうからだ。



大阪大学教授
小野 善康

実力・信頼度や閉鎖性と無関係

円の国際化が遅れているといわれて久しい。その理由には、日本経済が国際的に信頼されていないからだとされる。しかし、日本は現在戦後最大の不況下にあるが、それでも依然として世界第二位の経済力を持っている。また、ジャパン・アズ・ナンバーワンといわれたバブル期でさえ、円の

②日本が基軸通貨国を目指すのなら、輸入や援助の飛躍的拡大などを通じ経常赤字に転じ、債務大国として外国に円を垂れ流す覚悟が要る。

③円の国際化は、貯蓄態度など国民気質を問う次元の話なのである。

て、日本経済が信頼されていない、金融市場が閉鎖的である、といった点が指摘される。しかし、そもそも海外に円建て資産が存在しなくても保有できない。その点で、日本の場合は膨大な経常黒字を生んでいるため、たとえ海外に円をばらまいてもほとんど国内に還

米は復興援助と

対外赤字で実現
以上を念頭に、基軸通貨への道を考えてみよう。

まず第一段階は、自国通貨が決済手段として国際貿易に広く使われることである。それには、外国の欲し



国際化は十分に進んでいないといわれていた。

そもそも基軸通貨とは何であり、基軸通貨になると何がよいのか。どんな国が基軸通貨国になるのか。実は、一般にいわれるような経済力の反映とは、かなり様相が異なるのである。

ある国の通貨が基軸通貨になるとは、貿易の決済に広く使われること、および各国が外国資産として、その国の通貨建ての資産を多く保有することである。

このうち決済手段として使われることよりも、資産として保有される方が、はるかに重要である。実際に保有される資産の価値が、貿易決済に使われる額よりけた違いに大きいからだ。

円の国際化、赤字を覚悟で

問われる貯蓄姿勢

輸入激増してまで推進か

いものを生産するともども、自国通貨で援助をすればよい。たとえば米国がドルで援助をし、被援助国がその分米国製品を輸入すればドルでの決済は増える。しかし、これではドルはすべて米国に還流し、資産としては保有されない。

一段階にしか入っていないことがわかる。日本は現在世界一の援助大国であり、海外に円を配っている。しかし、輸出を伸ばして黒字をためているため、円がどんどん還流して、基軸通貨国にはなり得ない。

このように、円の国際化は、小手先の金融改革よりも、対外黒字か赤字かという、我々国民自身の気質である貯蓄態度にかかわる問題なのである。

からである。実際、米国は六〇年代以降、構造的な赤字に陥り、それによってドルを世界中に垂れ流してきているため、ドルが十分に行き渡り、資産として保有されているのである。

金融改革でなく国民気質の問題

目下、米国は貯蓄がマイナスになるほど使いまくりながら、空前の好況を支えている。供給力では全く需要力が強いのである。

高いドルは利益に合うといっている。これは、米国経済が瀬戸際に立っていることを示唆している。ドルが下がり、それを機に各国が米国株を売却しようなどとんでもなければ、バブルで好景気を持している米国は大打撃を受ける。このようにドルは弱含みの方がいいのである。

そのとき、デフォルト債務不履行)を起すような大幅な赤字では、通貨の信頼感がなくなり、その価値が暴落するとも思われる。通貨建てでは借金ができなくなり、基軸通貨にはなり得ない。このことは南米の累積債務国を見れば明らかである。

たえば、基軸通貨国である米国が景気過熱となってインフレを起せばドル安になる。その結果、米国のドル負債の価値が減少して、米国は得をする。借金棒引きである。

橋本龍太郎前首相が在任中に米財務省証券を売却した。その価格は暴落するぞい

先のことを考えずにごんごん物を買って楽しめば、世界景気をけん引して一國で支えていると尊敬され、国内も好況になる。それによって自国通貨という負債を垂れ流して、基軸通貨国になり、国際金融面の外交で政治力を発揮できる。

正か負かによるのであって、よくいわれるような日本経済の相対的な実力差や信頼の程度、金融市場の閉

第二段階は、国際収支赤字の累積である。赤字分は外国の資産として保有されるべきである。

51年生まれ。東京大学院修了、経済学博士。専門はマクロ動学・国際経済学